

途上国支援輝く女性たち

民間の経営手法身につけ自己実現

世界的な景気後退で暗いニュースがあふれる中、風をものともせず途上国支援に邁進する20、30代の元気な女性たちがいる。外資系企業や国際機関を軽やかにわたり歩く彼女らの強みは、語学力や女性ならではの感性だけではない。起業家精神や資金調達、組織運営のノウハウといったビジネスの最前線で通用するスキルの吸収にも前向きな、しなやかなたくましさだ。（鈴木淑子）

多様な国々の異なる価値観を
持った子どもたちが切磋琢磨し
て学べる場を——。小林りんさ
ん(32)は、全寮制のインターナ
ショナルスクールを日本につく
るようと、ひた走る毎日だ。

大学卒業後、外資系投資銀行
やベンチャー企業の役員などを
経て、昨年夏まで2年間、ユニ
セフ(国連児童基金)のフィリ
ピン事務所で、ストリートチル
ドレンの復学支援や職業訓練に
取り組んだ。奪われた権利を取
り戻し、自立を促すことが格差
の是正につながると信じて。

ところが、既得権の縮小を嫌
う富裕層の圧倒的な政治力、選
挙のたび繰り返される血なまぐ
さい衝突を見るにつけ、貧困層
が頑張っても、この国は変わら
ない。変えるには国民全体の幸
せのために行動する真のリーダー
を育てるしかない」との思い
を募らせる。その答えがインタ
ーナショナルスクールだった。
原体験は自身の留学にある。



高校時代、カナダで世界89カ国
に。夏休みに南米からきた
の仲間たちと2年間、生活を共
ルームメートの実家を訪ね、初

めて彼女が苦学生だと知る。世
界に厳然とある格差。愕然とし
たと同時に、「教育を受ける環
境さえあれば、そうした差も埋
められる」と感じた。

当座資金の支援や事業計画に
助言をくれる守護神の投資家、

香港でインターナショナルスク
ールを運営する人物に出会う幸
運にも恵まれたが、民間企業に
いた経験も生きている。

米国などの私立学校では、学
費や寄付以外に、不動産事業な
どを収入の柱に育て、教師や生
徒らに十分な教育環境を用意す
るのが一般的だ。小林さんの場
合も、投資銀行で培った不動産
投資や新興企業の資金調達など
のノウハウが、夢を実現するの
に役立ちそうだ。

「多くは偶然。それも、いい
方向に転がる偶然がいくつも重
なった。いまは、このプロジェ
クトをやり遂げることが自分の
使命だと感じています」

学び方を提案

野宮あす美さん(26)は研究員
としてシンクタンク、東京財団
(東京)とアライアンス・フォ
ーラム財団(同)で、「公益資
本主義」のプロジェクトに携わ
る。行き過ぎた市場信仰を改
め、もっと社会に利益を還元で
きるように資本主義を再構築で
きないかが、テーマだ。

野宮さんには、もう一つの顔
がある。ミャンマーの僧院学校
で開いている、子どもたちに創
造性や表現力を身につけてもら
うワークショップのプログラム
オフィサーだ。

少女時代を英米ですごし、多
様な国籍、文化を持つ人々は身
近な存在だった。大学在学中、



東京市内で投資家を前に事業計画を説明する小林りんさん
ミャンマーの僧院学校で学校新聞づくりのワークショップ
に組み込む野宮あす美さん(08年8月) 齋藤聖子さん。マイ
クロファイナンスをバン格拉デシュで手がけるNGOの支店で

企業・非営利とらわれない 女性の活躍続くだらう

ソーシャルベンチャー・パートナ
ーズ東京代表で、慶応大総合政策学部で
社会企業論も教える井上英之さん(37)
は、女性たちの活躍をこう分析する。
「もともと女性の方が途上国支援に
不可欠なコミュニケーション能力や共
感性の高さを備えている。出世や高い
年収に万能感を抱くこともない。NP
Oなども民間の経営手法をとり入れる
必要性を痛感しており、企業と非営利
といった垣根にとらわれず双方のスキ
ルを若いうちから磨いた方が、社会に
より貢献できることを彼女らは知って
いる。そうやって貪欲に自己実現をめ
ざす女性は増えていくだろう」

企業で武者修行

長友留奈さん(26)は、マイク
ロファイナンスと呼ばれる途上
国の低所得者向けの少額融資を
支援するNPO「プラネットフ
ァイナンス」(東京)のインタ
ーンシップとして、南太平洋の
サモアでの普及・教育活動から
帰国したばかりだ。次なる活動
の舞台を求め、準備中の長友さ
んは「企業でバリバリ働いてい
る同級生を見ていると葛藤を感
じることもある」と明かすが、
「男性よりも女性の方が自分の
やりたいことへのリスクがとれ
る。NPOには『ガラスの天
井』もなく、チャレンジのしが
いがある」。表情は明るい。
1年前にバン格拉デシュでの
インターンを終えた齋藤聖子さ
ん(27)は現在、コンサルティン
グ会社でコンサルタントとして
働く。だが、いずれは途上国支
援の現場に復帰する心づもり
だ。今の仕事はときに徹夜も求
められるが、「成功するプロジ
ェクトには何が必要なのか、民
間の感覚を肌で知りたいから」と、
激務を意に介す風もない。
「ジュエリー(宝石)をきつ
かけに、途上国の貧困問題に思
いを巡らせてもらうのも一つの
道では」と話すのは、「エシカ
ル(倫理や良識にかなう)」を
キーワードに、材料の採取や加
工の過程に児童労働などのない
ジュエリービジネスを起業準備
中の白木夏子さん(29)だ。

短大卒業後、英国留学中にイ
ンドのカースト最下層を支援す
るNGOの活動を学んだのを機
に、貧困問題に関心を深めた。
国際機関のインターンも経験し
たが、「限られた人たちの活動
では限界がある」と、ビジネス
を通して、途上国に関心のない
人にも参加してもらええる支援の
あり方を模索してきた。

デザイナーをしていた母の影
響もあってアクセサリーは子ど
もの頃から好きだったが、初め
から、それをビジネスにと考え
ていたわけではない。帰国して
から2年余り、不動産投資運用
会社で会計などを学ぶ「武者修
行」を経たうえで選んだ。